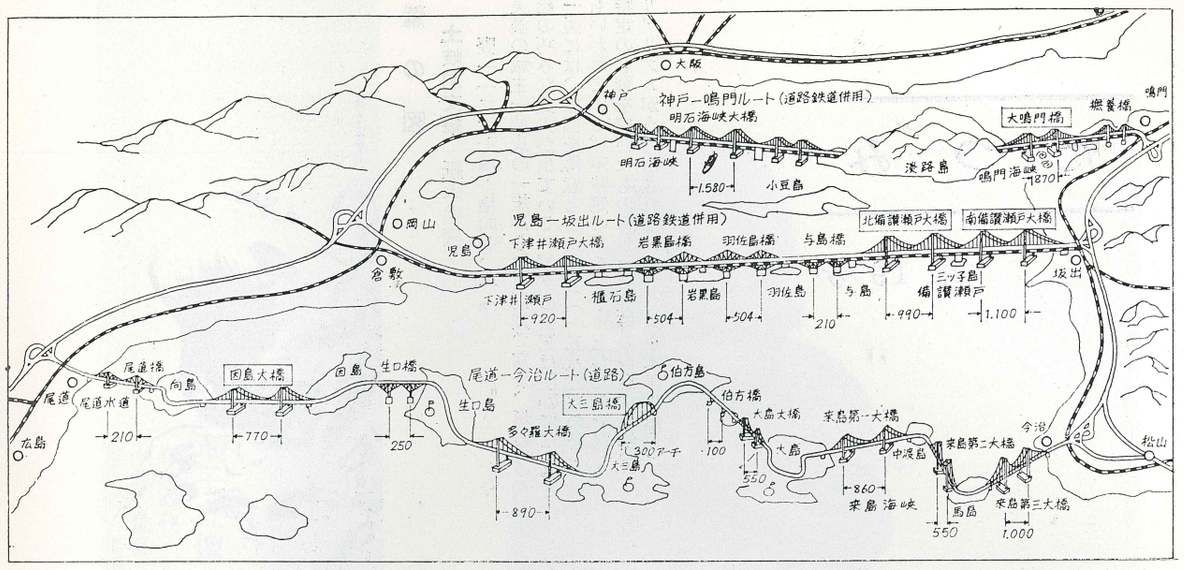

神戸製鋼所

本四連絡橋に取組む

期待の本州四国連絡橋プロジェクトが、いよいよ今秋着工されることになりました。鉄鋼・溶接棒・機械・軽伸と幅の広い製品と技術を擁し、早くから建設工事開発本部という専門の組織を作って、架橋技術にとりくんできた当社にとって、この本四連絡橋プロジェクトは、まさにその真価を発揮する絶好の場であると言えます。立地的にみましても当社の事業所の多くは、瀬戸内海に面しており、この連絡橋の完成によって、いろいろな影響をうける立場にありますし、また歴史的にみましても四国という土地は当社の生みの親である鈴木商店の金子直吉氏をはじめ、今日の当社をつくりあげるのに力のあった多くの人材を生んだところです。このようにいろいろな意味でこのプロジェクトは当社にとって意義深いものであると言えます。

鈴木商店のゴム事業

足立宇三郎

鈴木商店が、明治四十二年、門司郊外にあった大里製糖所を、日本製糖株式会社へ譲渡し、それによって一挙に得た利益六五〇万円を、さらに次の事業の拡大に投じたとき、鈴木商店の化学部門の拠点は東（あづま）レザー株式会社であった。同社の本社は大阪の稗島、現在のラサ・スケート場のあたりにあった。

工場は赤煉瓦の平屋建にて、硝花綿を使用した人造皮革、いわゆるレザーを製造した。その用途は大半、御堂筋に軒を並べていた下駄の鼻緒であった。その頃、社長佐藤法潤、取締役松島誠、本庄利平、技師長久村清太氏等であった。分工場として神戸の敏馬（みるめ）にゴム工場、大和田に合羽工場、米沢に人絹の研究所をもっていた。人絹研究は久村氏と米沢高等工業学校教授より転向した秦逸三氏が担任した。

さて、この東レザーも、ゴム、人絹と製品が多様化したから、大正六年に社名を東工業株式会社とかえた。そののち更に事情は変化して、敏馬分工場を分離して株式会社日沙商会の一翼とした。また人絹の研究も商品としての自信を得て、広島市千田町に帝国人造絹絲株式会社として堂々たる大工場を建設した。はじめ広島工場の日産は一函一〇〇ポンド入り百函程度だった。その人絹そのデニールはまだ可なり太いものだったので評判ははじめ良くなかった。そのころ一日、自分が稗島の本社を用件で訪ねたところ、松島、本庄、久村氏らが、米沢から送って来た一玉の人絹をはさんで話しあっていた。おもい起せば、これは大帝人の神代史の一ページであった。

さてゴム工場の方であるが、自分は創業に携らなかったため詳しいことを述べられないが、事業の発端には妙なかかわりがあった。それは鈴木商店が、麦を大量に輸入したが、何かの事情で手持が出来た。そこで処分の一策として、麦を原料とする飴の製造を考え、敏馬の浜に敷地八〇〇坪位の地上に、一五〇坪の三階煉瓦建工場を建築して台湾砂糖（黄双）の再製を始め国道沿いの酒蔵のところで飴の製造に手をつけた。明治四十年頃のことである。しかるに以外にも、この工場は火災にかかったため、飴は中止となり、飴に代ってゴム工業へ進出した。麦の買付は森衆郎さんのやった仕事だった。

さて飴がとまって、ゴムが出て来たが、鈴木商店は何故ゴムに手を出したか。それはレザーとゴムが似た商品でもあったが、これよりさき鈴木商店は、ボルネオ島のサラワーク王国にて、土地を租借してゴム農園の経営に乗出していたので、これに関連してゴム工業を目指していたのである。その一歩として、大阪の藤田組が、西宮の戎さんの北の方で経営していた摂津ゴム株式会社へ、六千円を出資して、神戸製鋼所の田宮嘉右エ門常務が、その監査役を引受けておられた。これがゴム工業勉強の第一歩だった。この方は深入りせず間もなく手を切った。

さて飴からゴムへ転換したその工場は、神戸市の東端の市境から半丁はなれた西灘村々内に在り、西国街道に沿い、うらはすぐ海だった。敷地八〇〇坪位の地上に、床面積一五〇坪の三階建煉瓦作りの工場一棟と、南京米倉庫だった昔の大きな酒蔵を使用した工場との二棟だった。そうして煉瓦建の一階には、ボイラ室、エンジン室、ゴムの機械としては、糊引器一基、ロール五基、押出機二基が据っていた。ボイラは6×30尺、エンジン出力二〇〇馬力位。酒蔵転用工場内には、自転車タイヤ型附用ワイヤ巻機四基、乾燥釜が数基あった。煙筒は煉瓦積六角形一〇〇尺位だった。従業員は男三〇名、女二〇名、雑役一〇名位だった。技師長は久村清太氏兼務、毎週土曜日午後本社から出張して来られた。本工場で作っていたのは、自動車タイヤおよびチューブにて、日産一〇〇ペアー程度だった。タイヤの商標はサクラタイヤ、アヅマタイヤ、ニチリンタイヤ

スマートタイヤ等にて評判は良く、九州の宮田製作所の自転車に装備されていた。本店より派遣されていたのは三人で、工場管理人今井完造、経理に高倍吉郎、その他の事務は足立の担当だった。工場内の職長は大体ダンロップから転出して来た人々だった。製品の販売店は窓口として、資本金一万円の日本輪業合資会社を通した。代表社員酒井丑松氏にて、本店の一室に内国食品株式会社と同居した。これは鈴木商店にては、はやくより酒井さんの係にて、英国よりタイヤ・チューブを輸入し、ある程度の販売網を有したからであった。タイヤの販売は東京方面を和泉惣左ヱ門氏が担当し、西日本は最近まで別府瓦斯株式会社の社長だった松本さんが壮年時代に担当していた。なお同室の内国食品株式会社は、鈴木商店経営の大里のサクラ・ビールを販売していた。輸出も相当に出た。その頃、ビールの小売値段は一本四十銭、輸出は十九銭だった。これは酒税がかかってないからである。ビールも酒井さんの轄下に在った。ゴム、ビールのほかに帝国汽船株式会社も酒井さんの監督下に在った。酒井という人は計数に緻密な人で、記帳の伝票には全部に眼を通し、且つ一欄ごとに判を押した。鈴木商店としては、松島誠さん等と同じく生抜きの故参店員であった。タイヤ干係の利益は毎半期決算に工場も販売部も各一万円前後だった。米ドルが金二円の時代だから、この金額は必ずしも少金ではなかった。大正五年、自分が赴任したとき、工場の資本主鈴木商店勘定は金四万円だった。

ゴム工場での自転車タイヤ、チューブの技術はスムースに行ったが、これは近くにダンロップというゴムの大学があったから、何方かの方法にてダンロップに追従してゆけば太過なかったのである。今井工場長はゴムにはシロウトであり、久村さんも人絹研究の大役があり、ゴムどころでなかった。それ故、すべてダンロップのしりつきをするのである。大正五年、ダンロップは英本社より再生ゴム製造設備を輸入した。再生ゴムとは古ゴムに今一度可塑性をあたえて再使用出来るものである。当社は大正六年に早速中田鉄工所に同一設備をつくらした。「二重釜」と通称し、径四尺×十尺位の圧力釜の内部に径二尺×八尺位の釜をいれ、この中へ粉砕した古ゴムと苛性ソーダ溶液を入れ、外釜へ蒸気を入れ、内釜を回転し、一定時間後、古ゴムを取出し、水洗乾燥の上、ねり上げるものである。当時、生ゴムはポンド二円位だったが、再生ゴムは七十銭の諸経費がかかり、結果的にあまり有利ではなかった。なお原料の古ゴムは国内にて集めることが不十分であるため、古ゴム部の課をおき、松田商店という古ゴム店を主人店員四人一括して雇入れて奔走さしたが、さらに今井氏は松田をつれて、上海、香港、シンガポールまで視察に行き、のちにはオーストリヤ、米国から古自動車タイヤを輸入した。貯蔵のため外人ボート倶楽部に隣接した酒蔵二棟を借入れ一杯になったが、たまたま神戸高商よりボートを入れさしてくれとのことにて、ボートを格納したが、学生の煙草の火の不始末から丸焼けとなった。しかし保険金を入手して損にはならなかった。

このゴム工場は、当時の町工場としても、中位であったから、世間では製鋼所のゴム工場と呼んでいた手前、現状で満足出来ず、道路をへだてた山側に千坪位の土地を整理して、事務所、倉庫、ボイラ室、二棟で六百坪位の木造トタン葺、一階建の工場を新築した。そうして、この一棟をファイバー工場に、一棟をゴムの拡張にあてた。新ゴム工場には、ロンドン支店に買付けを依頼したバーミンガム製の七〇吋幅の三本カレンダー。ホース製造用の六〇尺及三〇尺の蒸釜及び布巻機。小型自動車タイヤ製造設備をした。しかし水道ホース位は楽に出来たが、太物ホース、自動車タイヤは威張ったものは出来なかった。けれども会社が将来ホース、工業用品に進出した一歩は、このもたついたうちに在たので、決して無意義な苦労ではなかった。この失敗は技術に科学的準備がなく、ダンロップ標準の見覚え聞覚えを頼んだためであり、ここに眼覚めて工学士野村敬氏を鉄道院製品検査所よりむかえることとなった。なおこれら新製品の販売は、日本輪業合資会社の手をからず、工場にて直売の方針を取った。

次に新築工場の半分を占めたのはファイバー製造であるが、そも

そもファイバーとは、ただしくいえば英語にては Vulganized Fibre Sheet にて、直訳では「硬化繊維板」となる。商品としては単にファイバーである。その用途は、紡績工場用のケンス、電気絶縁材、鞄その他の容器の製作に使用された。大正十年当時、日本の年間輸入額は三百万円だった。当時は企業として年間三百万円のものが注目されたのである。

鈴木商店では、かねてより傘下の網干セルロイド株式会社の仕事として製造を計画し、殆んど着手の直前に、この事業をゴム工場の方へ譲りうけたのである。そこで当社では、米沢人絹研究所の青年技師塚本一郎君を米国へ派遣し、ニューヨーク支店より交渉してもらって、ボストンのスタンダード・ファイバー株式会社へ技術伝習のため、一ケ年の契約にて入所さした。同時に同社にストックになっていたファイバー製造機械の一組と原料紙を買入れ、さらに同社の副社長兼技師長のトーバルト・ハンゼン氏を一ケ年間招聘した。さらに一ケ年追加して二ケ年間滞在してもらった。もともとファイバーは、ノールウェイにて開発された商品にて、ハンゼン氏も、その技術を携えて米国へ移住したのである。同氏への謝礼は全社員の月給の合計に相当し、一ケ月一万円余であった。

さてファイバーの製造工程であるが、これは綿繊維の多い広幅の厚紙を原料となし、ボーメ十八度程度の鉛化亜鉛液のなかを通過せしめ、一定厚みまで鉄の太皷に巻取り、切断の上―巾四フィート、長サ六フィート位にして、水タンクに入れ、化学液を浸介し、乾燥のうえ、圧延して製品化するのである。製造はハンゼン氏の指導もあり、順調に運んだ。第一回輸入の原紙の関税が高いので、近藤氏と自分と神戸税関へ相談に行き笑われた。かりにも新工業をはじめるのに輸入原料の関税率も調べないのはおかしいとのことで、全くグの音も出ない。それというも機械と共に関税無頓着にて、出先で契約したためであった。そこですぐ国産にかかり、自分が高砂の三菱製紙に行き、見本を分析の上、同一組成の原紙の製造を依頼し、その後、同社の世話になった。同社は鈴木商店頓挫のときも、武士道的に原紙供給をとめなかった。製品販売は製鋼所より転勤して来た竹崎茂助君が主任として奮斗した。

ここで話は逆転するようになるが、東工業株式会社敏馬分工場、株式会社日沙商会の一部となりさらに日沙商会より後年分離して、日輪ゴム工業株式会社となった経過を語ってみたい。大阪の東工業株式会社が、人絹が技術的に成功し、帝国人造絹絲株式会社を創立し、広島に工場を建設したとき、大阪工場はぬけがらの如くなった。一方、敏馬分工場はゴム工場の拡大と、ファイバー製造開始を機会に、ボルネオ島サラワークにあったゴム農園の日沙商会と合併して、新たに株式会社日沙商会となった。社長は神戸製鋼所専務依岡省輔、取締役西川玉之助、芳川筍之助、今川完造、監査役本店支配人永井幸太郎、製鋼所常務田宮嘉右ヱ門、副支配人近藤正太郎、ボルネオ農園長大関雄只、ゴム技師長野村敬、ファイバー技師長楠瀬時治の陣容だった。この時、資本主鈴木商店勘定は約四百万円だった。

株式会社日沙商会の出現は、局面を更新し、従業員も前途に新光明を見出して気持ちを新たにした。西川玉之助氏が日勤して相談に乗った。今井工場長は宿病もあって退陣し、店の監理していた古るい寒天商池田商店を見ることになった。

しかし、新日沙商会は、体質上いくつかの弱点を包蔵していた。すなわちボルネオの農園のゴム樹は、いまだ採液樹齢に達してないから収益がなく、除草費を年々持去るので、若干本店でも嫌気が起り、一度は放棄論も起った。この本店最高幹部間の空気を見取って除草費は、新日沙商会にて工場利益より自給出来ることを希望した。次にファイバーは製品は出来たが、販売面では全くこれまで市場と干係がなく、一から開拓せねばならない。これは係員の努力を以ってしても、一定の時間が必要である。また、新設ゴム工場の方は、技術上すぐに立派なものが出来ないと共に製品の販売先もファイバーと同様に開拓して行かねばならない。結局、収支の立つのは自転車タイヤ・チューブの旧来の仕事だけとなる。かくの如き仕事

を合せて経理を見てゆく場合、決して楽でない。しかし、ともかくも各部の採算の好転を目指して社員は努力をつづけた。

その結果、ファイバーも一本立ちが出来るようになったが、数年後に金廻りの悪るい場面が生じた。それはタイヤ・チューブの販売は窓口を日本輸業合資会社が司り、製造の方は工場がやる。工場の製造は機械工員の能力の限度を標準としてつづけていたが、いかなる理由か、製造と販売との比例を失い、製品は倉庫に一杯となった結果、原材料の支払は祟みてハッタと困った。われわれは、これまで手形一枚書いたことはなし、金のいるときは本店へ云えばよし、金に困った経験は全然なかった。ところが、こんどの場合、本店自身も第一次欧州戦後の苦境にて、やすやすと工場援助は従前のように出来ない。

このような局面におよんで、日沙商会還元論が起った。すなわちゴム部は引離して独立の会社とする案である。この説の起った機微な干係は知らないが、本店は工場が本店を援助することを望み、少くとも、この上とも本店に頼ることを望まなかった。ゴム販売担当の酒井丑松さんへ、幹部から要求があったのか、酒井さん側から提議したか知らないが、この際ゴムを分離することとなし、日輪ゴム工業株式会社とした。社長は酒井丑松さんである。

株式会社日沙商会は農園とファイバー工場とよりなり、そのファイバーは後年、三井系の帝国堅紙株式会社と合併して、東洋ファイバー株式会社となり、竹崎茂助氏もその方へうつった。

残った農園は大東亜戦争に日本軍のボルネオ進攻に協力を求められ、日本の敗戦と共に終りをつげた。なお日沙商会としては、永年厚誼をうけたサラワーク国のラジャーのサー・ブルーの家もその主権を失うて英国へ引上げ、現在はマレーシャ連邦に加っている。

ただ、今も盛業中のものは、姫路市別所町佐土町一一一八に煙を絶していない日輪ゴム工業株式会社で、鈴木本家の鈴木治雄氏が社長の席に加わっておられる。なお各局面の変遷について、干係者、そのうごき等書くべきことが多いがそれはまた別の機会にゆづる。

外国電信部の思い出（二）

――今は亡き人々の面影――

廣岡一男

前号でも述べたように、私の外電部在勤は僅か二年足らずの短いものであったが、先輩・同僚にも恵まれ実に楽しい日々であった。思い出も懐かしい事ばかりである。

しかし、何といっても五十年余も遠い昔のことなので、往時茫然として、忘れてしまったことや、どうにも思い出せないことも少くない。当時の日記のようなものでもあればいいのだが、そんなものは何一つなく、唯おぼろげな記憶をたどって書く外はない。私は、まず、既に不帰の客となられた人達の面影を偲んでみたい。

木村喜之助（敬称略、以下同断）

主任の木村さんは、五尺そこそこの短軀で、童顔に度のきつい眼鏡をかけておられた。謹直で仕事熱心な人であった。外国商館で実地に鍛えたという英語の実力は素晴らしく、毎日山のような電信をテキパキ処理される仕事振には、部員は皆敬服していた。

温厚な人柄で、われわれ部員を叱咤されるようなことは曽て一度もなかった。愛称は「KKさん」であった。われわれは「KKさん」「KKさん」と呼んで親しんだ。人柄・実力共に真に立派な上司であった。

こんなこともあった。午後三時頃になると、よくアミダをやってお茶菓子を買ったものであるが、そのアミダの最高（確か五十銭であった）が当るのは大抵KKさんであった。それもその筈、クジの金額は後から書き入れるのである。「私はどうしてこんなにクジに

弱いんだろう……」と独言のように云われるのを聞いて、おかしくもあり、一寸気の毒な思いもしたものである。しかし、遂にその秘密の仕掛がばれ、私たちは頭をかいて恐縮したが、KKさんは何も云わず、ただ苦笑いされただけであった。そうしたことも今は懐かしい思い出である。

もう十年程前になるか、何かの用事で上京されたKKさんを迎え、在京の有志数人が人形町の料亭に集って細やかな歓迎会を催うしたが、大層喜んで出席して下さった。とてもお元気で、昔に変らぬ独得の口調で何かと懐旧談などされたのであったが、思えばそれが最後のお別れになってしまった。

竜　隆直

東京帝大出の法学士。背たけは五尺二寸位の短軀だが、骨太のがっしりした頑丈（がんじょう）な体軀、そして四角い顔に漆黒の口髭をはやし、見るからに堂々たる貫禄であった。年配は三十近かったろうか、われわれは「竜さん」と敬称で呼んだ。さんづけで呼んだのは、木村主任の外はこの竜さん一人だけであった。

確か鹿児島出身で、竜という姓も変っているが、人間的にも凡庸ではなく、云わば豪傑の風格があった。普通一般のサラリーマン・タイプとは全然違うものがあった。このような人物は、外電部だけではなく、鈴木商店全体としても実に異色の存在であった。

毎日出勤して机の前に坐ってはいるが、仕事は殆んど全然しない。一々コードを引いて電文を飜訳するような細かい事務は、竜さんのような人には合わないし、また独法出の竜さんに英語の仕事は無理でもあった。KKさんもそう思われたのか、こんな竜さんに対して何も云われなかった。

一体、鈴木商店がどうしてこのような人物を採用したのか、殊にどうして最も不適当と思われる外電部へ勤務させたのか、私は人事課長や支配人の良識を疑わざるを得なかった。

しかし、私は竜さんが好きであった。学校の親しい先輩のように

も思えた。竜さんもまた私には特別の好感を持たれ、郷里姫路で挙行した私の結婚式にもわざわざ出席して下さった。牛鍋の三つ輪にもよく連れて行ってもらった。竜さんは仲居のお花さんがご贔屓（ひいき）であった。

竜さんは、結局、在社数年にして退社し、東京で弁護士として再出発された。私が下関に転任してからのことだが、弁護士の用件で出張して来られた竜さんに何度かお目にかかったが、その処を得られたせいか、実に生き生きとした竜さんであった。

その後、深川区会議員に出られ、政治家としての第一歩を踏み出された。当時既に著名だった麻生久（社会党）とも親交があったので、漸く雲を得た竜の如く、その後の活躍を心から期待したのであるが、不幸にも若くして他界された。真に痛惜の至りである。

竜さんは、確か、住田正一・肥後誠一郎・下坂八郎の諸兄と同期の同窓であったが、竜さんだけは肌合いが異っていた。その是非は別として、竜さんには昔の武士が町人を蔑視したのと同じような一面があったのではあるまいか。ある時、前記同窓の一人のことを「彼奴はまるで高商出のような奴だ」と吐きすてるように評されたことがあった。所詮、竜さんは商社人には向かない人であったが、しかし私にとっては最も親しみ深く懐かしい先輩であった。

（**後記**）物故した同僚柴田・上田・山岡・日野・井上の諸君についても書くつもりであったが、紙数の制限があるので次号に譲ることとした。

なお、前号でもお願いしたが、米田正一君ほか消息不明者につきご存知の方は、本誌編集部または小生宛お知らせ願います。